

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2011年春 第12号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaqa.ne.jp

ジャカルタの今昔

渡邊悠三 ('69卒)



2010年9月22日に日本を発ち10月4日に Jakarta を去るまでほぼ2週間、Jakarta だけに滞在して「感傷旅行」をしてきた。宿泊先は Guest House。何せホテルと比べると格段に安い。朝飯付き(日本食)で、洗濯もしてくれて、PC の Network は使い放題である。それでお世話になったが、ロケーションもブロック M に近く、現役時代に23年前まで Kebayoran Baru に住んでいた身としても懐かしい。

私の職歴をご披露する。1969年に大阪外大インドネシア語科を卒業後、商社に入って南洋材を担当した。最初にインドネシアに来たのは1971年だった。以来、2年とか1年の任期でカリマンタン、スマトラ、シンガポールなどに単身赴任(ないしは独身)で、スラウェシやイリヤン(現パプア)も含めてインドネシア中を駆け回って、日本との間を行ったり来たりしてきた。そして最後に1982年~1987年までの5年間、家族ともども Jakarta に赴任した。その後1997年ごろに3日間だけ Jakarta に出張してきたが、短期間なので印象は薄い。したがって、私の Jakarta 歴はどうしても23年前まで遡ってしまう。

一昨年、グループ会社で環境関連の事業をしている会社を退いて、いわゆる完全引退をした時に、体力的にも“あと10年を目途に、Activeに行こう”と決めた。昨年4月から千葉大に入学して院生として「学生」をしている。(そして、南十字星会関東支部の支部



長もやらせてもらっている)。「年末に修論の提出を」と言われて、そのネタ探しもあって、今回の感傷旅行という気楽な旅に来たわけである。滞在中の9月28日には、Jakarta の南十字星会にも参加させてもらった。

空港から Taxi に乗る。昔 Jakarta にいた、という私のお話を聞いて、運転手は「変わっただろう！本当に変わった！」と何度も言う。その時は私も相槌を打っていた。ところが、Jakarta にしばらく居て、離れるさいは“やっぱり、よくも悪くも変わってないなあ！”という印象だった。

年相応の運動ということで毎朝、明け方の薄暗いうちに宿舎を出て、ウォーキングをした。歩道はアスファルトではない。かつては敷石が施されて、整備されたはずなのだが、今は穴ぼこだらけで入念に下を見て歩かないと危ない。並木が大きく育って歩道の真中に

鎮座していても、伐採されないどころか、ところどころに大きな植木ポットが歩道のど真ん中に置いてあったりする。仕事の経歴上わかるのだが、敷石は正しく施工されていない。

車道は車とオートバイの波で活気があるが、道を横切るのは命がけ。大通りなどの側道と対向車線をみると、みんな信号を守っているようだ。しかし、始終どこかに車かオートバイ、バジャイが走っている。いつまで待っても一気には渡れそうにないのだ(写真)。

そこで、信号に関わりなく、走るものが途切れた時点で急いで横切るという、昔ながらの手法を取った。こんなことをするから車は“危ないぞ!”とばかりにクラクションを鳴らすのだろう。要するに「人間よりも車が優先されている街」と思えば分かりやすい。

1~2時間のウォーキングの後、宿舎に戻れば、シャワーを浴びて朝食。分かっただけで“快適”だが、インドネシア語を全く理解できない初めての旅行者には「驚き」となるだろう。Guest House といっても、ボーイと女中とガードマンが居て、“Tuan!”の顔を常にうかがっている。そして“Tuan”たる日本人は数カ月単位で住んでいる人が多くて、下宿感覚なのだろう。それにしても何故か共有の食堂では食事をせず、各部屋で食事をする人が多いし、日本人同士でもほと

んど会話を交わさない。“日本人は社交下手だなあ”とつくづく

思う。半面、道を訊ねれば、ニコニコして一生懸命に教えてくれるインドネシア人と比べて“どちらがいいんだろう?”と考えてしまう。

ところが政府の Office とか、民間 Office などの“偉いさん”に会うとなると、彼らはほぼ例外なく、必要以上に居丈高になる。そこで働く Office Boy に対してだけではなく、私に対しても、身分が学生だと分かると同じである。

そうだ、インドネシアは「階層社会」だ。気になっていた交通事情、宿舎での使用人の対応など、どれをとっても「階層社会」をキーワードにすれば理解しやすいかもしれない。

ある日の午後、モナスの塔と博物館を訪れた(写真上の㊦と㊧)。白状すると“どちらも私にとって初めて訪れる場所”である。Keb.Baru では、今回初めて Bajai にも乗った。ちなみに交通法規上、現在では Jakarta では、ベチャは禁止となっているそうである。施設はともに極めて訪問者が少ないという印象だった。モナス(独立記念塔)の地下の博物館では「独立史」の説

明図が掲示されているが、人はまばらである。オランダ時代のことはミソクソだが、日本軍のことはさほど悪くは描いていない。私は専門的に取り組んだ訳ではないがインドネシアの現代史=独立史ということ言えば、どうやらスカルノとスハルトの時代を一つに括ってもよいのかな、と思いつけている。

2つの時代の間では随分と統治手法や時代背景も異なるが、共通点は「インドネシアの統一を目指した時代」ではないか、と思っている。日本のマスコミなどでも誤解が多いかもしれないが、現代のインドネシアが「インドネシア」として1つの国としてまとまろうとしたのは時代的には新しく、その背景となる共通項は「かつてオランダの植民地だった」ということだけだろう。それ以前の王国では、統治領がオーバーラップする部分もあるが、基本的には時代毎に異なる版図である。日本のように「国土・民族・言語」がほとんど単一というのは世界でも珍しいのだ。そしてスハルト体制崩壊後、短期政権が続いて、ユドヨノ政権で、そろそろ安定してほしいというのが、内外の意向のようだが、歴史はどう流れて行くか。

何が言いたいかというと、所与の状況として「ひとつのインドネシア」があったのではなく、放っておけば小国乱立になるのを避けて、大インドネシアでまとまろう、とした。この点では、スカルノもスハルトも同じだろうと私には思える。そしてそのような状況は「インドネシアが特殊」というわけではない。ヨーロ

ップの先例を見るまでもなく世界中がそうなのであって、「日本が(ほぼ単一の文化という意味で)特殊」なのだ。そういう視野を持って現代のインドネシアを見つめてみたい。学生に戻った私の願いでもある。

ちょっと理屈っぽくなったが、長年過ごしたインドネシア

はやはり私にとって“第二の故郷”。懐かしさを実感できた「感傷旅行」だった。ジャカルタ南十字星会の方々与会食したレストランのあるビル(写真)も“躍進”を感じる。皆さんいろいろありがとうございました。



寄稿

Apa & siapa

旅の途中

亀山 恵理子 ('96 卒)

初めてインドネシア語を耳にしたのは、旧大阪外大に入学した1991年の春でした。当時教鞭をとっておられたアイブ・ロシディ先生が話す言葉を、森村蕃先生が日本語に訳してくださったことを今も覚えています。そのときから数えると、ちょうど20年になります。

インドネシア語専攻を選んだのは、東南アジアや南北問題に関心があり、まずはアジア事情を学びたいと



アチエと一緒に働いた元赤十字スタッフの友人と
(向かって左端が筆者)

脈を考えながら言葉を訳すことの難しさの両方を実感しました。

2000年の春からは開発協力の仕事に従事しました。大学に入学した頃から興味をもってはいたものの、以前にはどうすればその仕事に携われるのかよくわかっていませんでした。ですが、機会は突然やってきて、バリ島の空港で西ティモール行きの飛行機を待っていたとき、後に働くことになる日本の援助団体の方と知り合いました。待合ロビーで話すうちに、インドネシア語ができるならば履歴書を送って下さいと言われ、1ヶ月後には住民投票後の生活再建と独立へ向けた国づくりがすすむ東ティモールに向かいました。

それから10年間は、途中大学院への復学やオランダ留学もはさみながら、NGOやJICA（国際協力機構）、赤十字のスタッフとして、東ティモールと津波被災後のインドネシア・アチエ州で復興支援事業の実施運営にたずさわってきました。そして2010年の春に帰国して、今は大学教員として国際協力と東南アジア関連の

同僚の子どもの生後40日のお祝い儀式（アチエ）



思ったからでした。インドネシアで何が起きているのかを実際に見聞きたいという気持ちから、学部3回生を終えた時点で1年間ジャカルタに留学しました。留学といってもあまり大学には通わず、バスに乗ってジャカルタ市内や近郊に出かけたり、列車、長距離バス、そして船でジャワやスラウェシなどへ旅したりしました。また労働問題に取り組む現地NGOの活動にもついてまわりました。危なっかしい留学生でしたが、それでも1年間を無事に過ごせたのは下宿先の家族や友人のおかげと思っています。

帰国後は、大学院でインドネシアの児童労働や国際開発の研究に取り組みました。その傍ら、インドネシア語の通訳をするようにもなりました。見本市での商談や国際交流事業、企業研修などのほかに、当時まだインドネシアの支配下にあった東ティモールで活動する医療ボランティアチームにも同行しました。通訳の経験からは、言語や文化の異なる人びとの橋渡し役として機能する楽しさと、双方が生活してきた社会の文



東ティモールの首都ディリ。海の向こうに見えるのはアタウロ島

授業を担当しています。復興支援が事業として行われるとき、それは大抵の場合数年で終わりますが、紛争や災害を経験した土地の人びとの暮らしはずっと続いていきます。支援事業だけではなく、その土地の人が営む長期的な復興をみつめ、国際的な支援や“かかわり”のあり方を考えていく作業に最近取り組み始めたところです。



キャンパス便り

大阪大学 世界言語研究センター
准教授 原 真由子

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

バティックのワークショップ

2学期に入ってすぐ10月12日に、「世界無形文化遺産バティックに触れる」というタイトルで、サザンクロス講演会を開催しました。講師はジョグジャカルタの若手バティック・デザイナーである Rosso 氏です。

同氏は、身近な自然の草木を染色の原料として用いる独特の色使いと、現代的なカジュアルな服装にバティックを用いた斬新なデザインで有名で、ジャワの古都ジョグジャカルタに工房を構え、ジャカルタやバリなどに多数店舗を展開しています。

講演では、伝統的なバティックと現在の流行についてのレクチャーと染色の実演がありました。染色の実演では、布や色止めの材料はインドネシアから持ってきたものを使用しましたが、色づけ用の植物は、Rosso



ロッセ氏がバティックの講演で染色実演も

さんご自身が日本で採取された植物（どうやらムクロジのようでした）を用いました。

学生たちのほとんどは実際の染色作業を見るのは初めてで、非常に印象深い経験となったようでした。質疑応答も活発になされ、バティックに関わる技術、デザイン、流行、労働、経済など、色んな側面にわたりました。この講演会によって、バティックを事例として、インドネシアに見られる様々な伝統文化と現代におけるその変化や保持についての理解を深めることができたのではないのでしょうか。

語劇祭

大阪大学との統合後は、外大時代の間谷祭で行われていた語劇が、学園祭「まちかね祭」の1つのイベント「語劇祭」として箕面キャンパスで開催されており、今年度は11月5日・6日に行われました。

インドネシア語専攻は、数年前に上演した *Jaka Tarub dan para bidadari* 「ジャカ・タルブと天女たち」を再演しました。

例年通り、2年生が中心となって上演に臨みましたが、実際に語劇に参加できる人数が少ないことが悩みの種だったようです。その背景には、阪大統合後はインドネシア語専攻の定員が10人と少なくなったこと、また学生の所属クラブ・サークル主催のイベントが学園祭のメイン会場である豊中キャンパスで行われることがあげられるでしょう。

それでも、登場人物の台詞や人数を調整したり、豊中キャンパスで学ぶ1年生にも裏方に参加してもらったりしながら、劇を完成させていきました。本番では、



練習の成果を十分に示し、予想以上に堂々と演じてくれました。来年度以降も、上演にかかわるいくつかの

問題を解決し、インドネシア語劇を続けていってほしいと思います。



箕面キャンパスでは、語劇祭のほかに、音楽イベントも行われました。そこでインドネシア語専攻4年生有志6人が北スマトラ・アチェの伝統舞踊である「サマン」を披露しました。

現地で習ってきたわけでもなく、見本とするのは映像だけでしたが、放課後の共同研究室で夜遅くまで練習し続けたかいがあり、



本番ではサマンの特徴であるスピード感が保たれ、なかなかさまになっていました。

ほとんどは卒業論文を執筆しながらであったものの、練習が適度な息抜きとなり、大学生活最後の良い思い出になったことでしょう。

インドネシア語のスピーチコンテスト

インドネシア語のスピーチコンテストが2カ所で開催され、インドネシア語専攻の学生は両方に参加しました。まず、11月13日に神田外語大学主催のコンテストで、グループA（インドネシア語学習歴2年以内の大学生）の部に1年生の山下穂乃香さん、同じく梅田彩香さんの2人が参加しました。ともに夏休みに参加したスダの農村ホームステイの体験に基づき、山下さん



（写真㉔）はインドネシアと日本のゴミ捨てに対する意識の違いについて、梅田さんはインドネシアの農村における人間関係の緊密さについて、インドネシア語でスピーチを行いました。梅田さん（㉕）が1年生ながらグループ中2位を受賞しました。

もう1つのスピーチコンテストは、11月21日に南山大学で開催され、2年生の網大介さん、坂田菜摘さん、中野美穂さんの3人が参加しました。網さん（右段の㉖）はインドネシアと日本の親密さの表現方法の違いに焦点を当て、坂田さんは（㉗）インドネシア



人看護師・介護福祉士候補者への教育問題について、中野さんはインドネシア人の心配りと優しさについて、自分の考えをインドネシア語で発表しました。3人のうち、中野さん（㉘端）が見事2位を受賞しました。

結果的には、成績には差が出ましたが、それぞれ自分の体験に基づきテーマを見いだし、それに向かい十分に準備をし、その過程でインドネシア語力や論理的な思考に成長が見られたと思います。主にインドネシア人教員のシンペン先生によるご指導のもと、何度もインドネシア語の原稿を書き直し、その後正しい発音とイントネーションに近づくことを目指しながら、スピーチ暗唱の練習を繰り返しました。

また、コンテストにおいて、インドネシア語を学ぶ学外の参加者と交流することによって、新たな刺激を受け、インドネシア語学習やインドネシア研究に関する今後の動機づけにもなったようです。

シンペン先生帰国

4月以降インドネシア語専攻の教育に携わってこられたI Wayan Simpen先生が任期を終え、本務校のあるバリ・ウダヤナ大学に戻れることになりました。1年という短い期間でしたが、Simpen先生が学生たちに与えたものは大きいものでした。特に接する時間の長かった1・2年生にとっては、授業内容はもちろん、学生へ向けるバリ人特有の(?)優しい視線



や態度が印象深いものとなったようです。Simpen先生ご自身も、日本人学生への授業や付き合いを通して、インドネシアにはない日本文化・社会の特徴を知ることができ、良い経験ができたとおっしゃ

っていました。今後も、インドネシア語専攻と何らかの関係が続くことを願っています。



アサハプロジェクト に参加して

塩見 澄 (72 卒)



《はじめに》

2011年1月6日、日本・インドネシアのナショナルプロジェクトであるPTインドネシア・アサハン・アルミニウム(略称イナルム)は創立35周年を迎えました。アル

ミ製錬業の日本国内での空洞化に対処し、戦略物資であるアルミニウムを安定的に確保すべく日本政府の閣議了解に基づきこのプロジェクトは開始されました。しかしながら、投資総額4110億円のうち60%強が円ローンであったため、その後の円の大幅な切り上げにより、その当初より膨大な為替差損を被り、このため1度ならず2度までも日伊両政府の再建支援を受けました。また、アルミ地金の原料であるアルミナの輸入問題や製品であるアルミ地金の日伊間での割り当て問題等この30数年間にはプロジェクトの中断もありうる大きな問題にも直面してきました。

幸いにしてここ数年は毎年1億ドルを超える税引き後利益を計上し、今会計年度が終了する2011年3月には

《経緯》

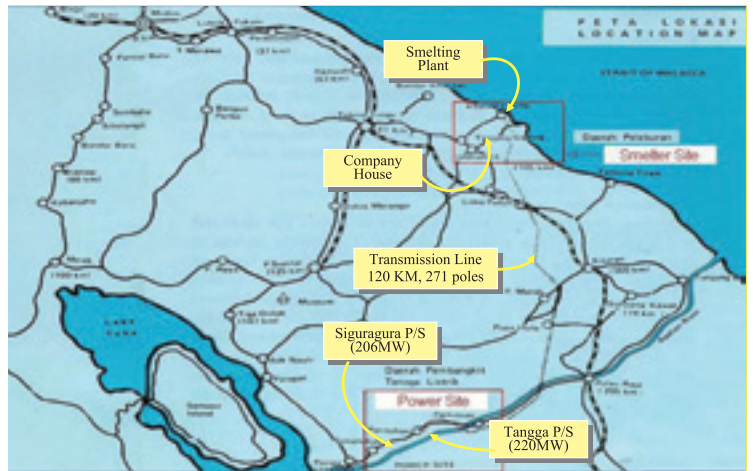
- ・1975年 イ政府及び日本側民間12社がマスターアグリーメント調印
- ・1976年 イナルム設立
- ・1978年 アルミ製錬工場、水力発電所、送電線、港湾等の本格工事開始
- ・1984年 完工式(アルミ電解炉全510炉操業開始)
- ・1987年 第1次再建築実施
- ・1994年 第2次再建築実施
- ・1998年 水源のトバ湖 未曾有の渇水で操業率40%まで低下
- ・2003年以降 トバ湖の豊富な水量、地金価格の上昇、円借款のドル転換、種々の技術改良等により業績は大幅に改善、今日に至る

累損も一掃できる見込みとなりました。

これも偏に日伊両政府の絶大なるご支援の賜物と感

アサハプロジェクトの概要

所在地 ; インドネシア共和国北スマトラ州(本社ジャカルタ)
 所要資金 ; 4110億円(内アルミ製錬工場2240億円、水力発電所1230億円、インフラ480億円、運転資金160億円)
 アルミ地金製錬能力 ; 公称225千トン/年(直近実績255千トン/年)
 水力発電所(2カ所) ; 最大出力513MW、通常出力426MW
 インフラ ; 送電線(120km)、港湾(全長2.5km)、道路(17km他)社宅(1万人収容)、用水、学校、病院他
 従業員 ; 約2100人(2010年3月末時点)



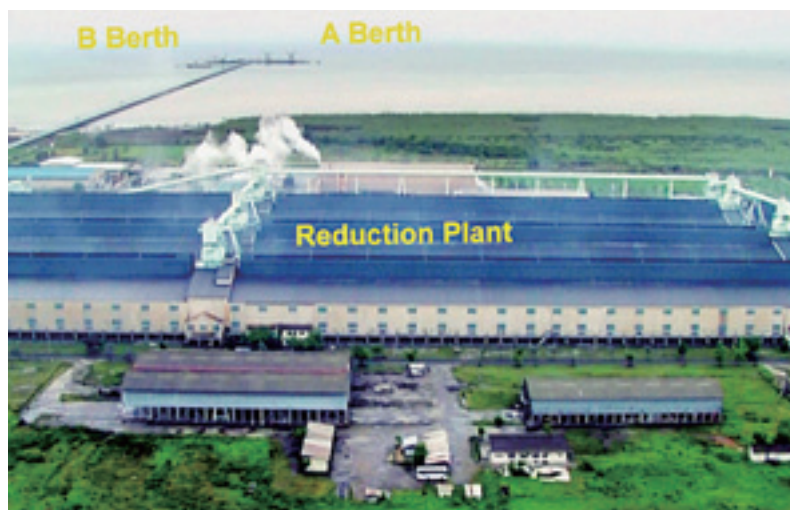
謝しつつ、本プロジェクトに従事された多くの先輩方の真摯なご努力がここにきて漸く実を結んだことにイナルムの現在の責任者として素直に喜びをかみしめています。

《私のアサハン勤務》

1976年1月、住友化学よりジャカルタに着任。住友商事ジャカルタ支店の一隅をイナルム本社とし、初めての海外駐在勤務を始めました。日本人は私を含め3人で一番の下っ端でした。

創立後間もなく日伊のお客様数百人をお迎えし、ジャカルタ及び北スマトラ州都のメダンで創立記念パーティーを開催しました。まだ、カードでの決済などできない時代でパーティー費用の5000万ルピア(約3000万円)を銀行から引き出し、紙袋から溢れ出る紙幣を抱きかかえて運転手が待つ車まで200mほどを必死の思いで歩きました。

現在では想像もできない体験でしたが、懐かしくもあります。



つたないインドネシア語で事務所の什器・備品の購入のアレンジをしました。業者が持参した領収書（当時は請求書なるものはありません）の金額が見積額に10%程度上乘せされておりクレームをしたところ“何も分かっていない奴やな”って雰囲気。インドネシアでの最初の洗礼でした。1度目の5年間はまさにあつという間に過ぎました。この間スハルト大統領夫妻をはじめイ国の高官が何度となく各種セレモニーにご来臨されました。

帰任後2年も経たずに1982年5月に2度目のジャカルタ勤務を始めました。各種プラントの操業開始を控え実に慌ただしい時期で、月に2度はスマトラに応援出張を繰り返しました。朝一番のジャカルタ発に乗り、片道7時間の発電所サイトまで日帰りで行ったこともありました。若さと仕事への興味がこれを可能にしたようです。

本社が南半球にあり、プロジェクトサイトは北半球ですから、この2回の赴任期間8年間に少なくとも200回程度は赤道を横切ったことになります。

2004年秋にアルミニウム事業部の担当を命じられ、イナルムが再び身近に感じられるようになりました。案の定、2007年6月今浦島の状態で3度目のジャカルタに戻ってきました。20数年ぶりのジャカルタは高層ビルが

林立し、道路は恒常的な大渋滞、おまけに空気は悪いという状態でした。

1度目の赴任時は中国人街のコタまで車で15分ほどでしたが、今では1時間以上もかかり昼食などで出向く気にも到底なれません。

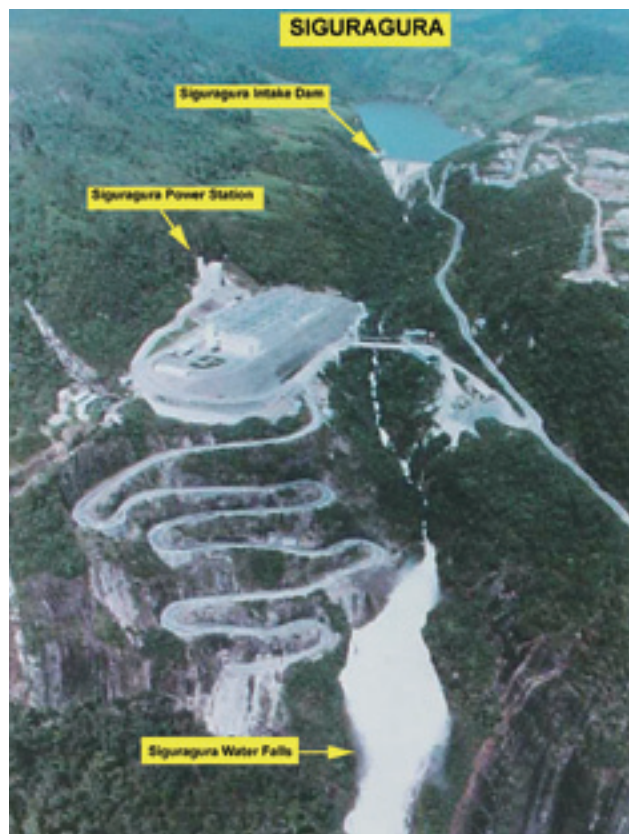
ジャカルタの街は大きく変貌しましたが、インドネシアの文化や人情は20数年前と同じです。ただ、当時よりも情緒的には多少控え目に、論理的には多少多い目に日々の業務を進めています。

《最後に》

インドネシア政府高官から“近頃なぜ日本企業は昔ほど当国でのビジネスがうまくいっていないのか？なぜ韓国や中国の企業の後塵を拝するのか？”との話がありました。インドネシアの多くの人々から十分な実力に裏付けされたたたかさを感じられるこの時代において、我々はインドネシアという異文化の中で、この人たちとの調和を保ちつつ、いかに

して自己の考えを真摯に、的確に伝達できるのか大いに考える必要があるように思えます。

2011年2月からアサハプロジェクトの延長交渉が始まりましたが、交渉ごとは日伊双方の株主（日本アサハアルミ59%、イ政府41%）にお任せし、引き続きイナルムの安全・安定操業に全力を傾注していかなければならないと思っています。



寄稿

Apa & siapa

私とオルゴール

伊藤 敏雄 (’65 卒)

1965 年卒業後、4 年程経って、当時働いていた外資系の会社から研修目的で派遣され、イギリスとスイスで 3 カ月を過ごしました。スイス滞在中、ローザンヌを訪れ、とある時計店に足を踏み入れた時にオルゴールに出会いました。それは、それまでに見たことも聴いたこともない音の小箱で、精密な機械から流れる演奏はまさに天上の音楽でした。

当時の月給に相当する価格でしたが、思わず買い求めました。帰国後、娘の 1 歳の誕生祝いの最高の贈り物となりました(ちなみに娘が 40 歳になった今も美しい響きを保っています)。本物のオルゴールの素晴らしさは、私に強烈なインパクトをもたらしたことを覚えています。

その後、職を転々と変わり、サラリーマンを続けながら 3 年の準備期間を経て 1988 年、主としてスイス製オルゴールを取り扱う(商店に毛の生えた程の) 商社を設立しました。若い頃スイスでのオルゴールとの出会いがきっかけになったのは言うまでもありません。

開業したタイミングが良く、当時は高価でも珍しい

存在のオルゴールは苦もなく売れたものです。それらを所有することは人々にとって高いステータスと評価された時代です。そのような環境の中、会社を立ち上げて 10 年強は安泰でしたが、その後の 10



オルゴール展の会場風景



年はオルゴールに限らず贅沢で趣味性の高い物は売りづらくなり経営も四苦八苦です。本来なら多くの皆さんのように無事定年を迎え悠々自適な生活にソフトラディングしたかったのですが、やめるにやめられない状況で、69 歳になった今も働いています。



世界最高峰のオルゴールメーカー・リュージュ本社(スイス)で

人生何が幸せかと自問する時、この歳でも元気に働けていることに感謝すべきと思っています。なによりも好きなオルゴールに囲まれて過ごす毎日が幸せなのでしょう。

この先 10 年、どのような展開になるのか予測は出来ませんが一日一日を大切に生きていこうと考え、日々精進しています。

(注) オルゴールって、何?と思われる方は弊社(株)トーアトレーディングのインターネット・ホームページ <http://www.toa-orgel.jp/> をご覧ください。何かのヒントになるかもしれません。

オルゴールは音楽を再生する画期的な発明品として 1796 年スイスで誕生しました。素晴らしいのは、200 余年を過ぎた今でもその技術は見事に継承されスイス製高級オルゴールとして世界中の多くの人々に愛されています。(皆さんの周りにあるオルゴールの多くは戦後、日本で生まれた大量生産による、いわゆるオモチャのオルゴールです)



オランダのオルガン工房で 2 人の大男に挟まれて



マタハリの話

板坂 勇夫 (’47卒)

歳末になると日本各地でベートーベン「第九」の“歓喜の歌”が熱唱され、今や季節の風物詩のようになっている。流行のルーツについては諸説あるが、そのひとつに徳島県の鳴門市が登場する。

アジアで最初に「第九」が演奏された地として、鳴門市内に「第九の里」が残されている。そこはかつて第1次世界大戦で敗れたドイツ軍兵士の俘虜収容所があったところ。兵士たちが互いに励まし合うため“歓喜の歌”を斉唱し、周辺の住民の間で「第九」熱が高まったと伝えられている。

日本が太平洋戦争に敗れた当時、満州に居住していた多数の日本人がソ連軍に拉致され、酷寒のシベリアで強制労働に従事したとき、彼らの間で歌われたといわれる“異国の丘”の話と相似たものがある。

さて話が横道に逸れてしまったが、本題に戻る。この第1次世界大戦当時にドイツ軍のもとで諜報活動に大活躍したマタハリと名付けられた女性スパイについて語りたい。

彼女はドイツ人ではない。1876年にオランダで生まれた。長じてオランダ軍の高級将校と結婚し、夫のジャワ現地軍への赴任に従った。ジャワで裕福な生活を送っていたが、27歳で離婚してオランダへ帰国。そこから彼女の美貌と才智が発揮されて社交界入りし、バリ島で習得したダンスを艶っぽく踊り、多くの政治家や実業家や軍人と浮名を流したそうである。

やがて彼女はドイツ軍に招かれて、ヨーロッパでのスパイ活動を開始したが、ジャワ生まれのマタハリと自称。欧州各国で有名人となってしまった。しかし、大戦終結とともに同盟国側に逮捕され、1917年10月パリ郊外ヴァンセンヌで銃殺刑。12発の銃弾を浴びて華やかだった41歳の生涯を閉じた。

インドネシア語で太陽を意味するマタハリの第2号が、30年後の中国で“東洋のマタハリ”として出現した。川島芳子がそれである。

彼女は1907年に清朝の王族である肅親王の王女として北京で生まれたが、父の友人であった日本人の大陸浪人の川島某の養女となり、川島芳子と名乗った。この養父・川島が満蒙開拓と満州建国を進めた日本

に協力貢献したことから、芳子も日本の関東軍による諜報活動に従事する。断髪して“男装の麗人”となった彼女の名声は、日本内地でも広く知られた。

1945年8月の日本の敗戦とともに、蒋介石の国民党政府は芳子を漢奸として逮捕、1948年3月銃殺刑に処した。奇しくもマタハリ第1号と同じ41歳だった。ただ、川島芳子の銃殺刑は執行されなかったという説も一部に流れている。

このように有名な2人の女性国際スパイが「マタハリ」と名付けられていたことから、マタハリとはどこかの国のスパイを意味する言葉ではないかと思っている人も多いようだ。

ここで蛇足であるが、もう1つマタハリに絡む話。題名は忘れたけれど琉球民謡の歌詞の中に“マタハレノ・チュンダラ・カムシャマヨ”といったような囃子言葉がある。これは“Matahari-mu cintalah kamu sama ya(お日さまは、おまえたちを、等しく慈しんでくださるよ)”が源流であると、私は思い込んでいる。

江戸時代、長崎とバタヴィア(現インドネシア)の間の船の往復が頻繁であったことから、インドネシア語が沖縄を経て日本内地に流入した例は少なくないだろう。インドネシア語のチャンプルー(混ぜ合わす)が、沖縄で料理名のチャンプルーになり、日本で長崎チャンポンになったのもその1例。

このような雑学的な研究も結構楽しいものである。



☆☆ 総会式次第 ☆☆

2010年10月23日正午～

新阪急ホテル

開会の辞・司会 片山 秀樹 (90卒)

物故会員への黙祷

会長挨拶 山口 寛 (58卒)

～会長交代について

来賓挨拶 教員 松野 明久

福岡まどか

原 真由子

乾杯 中村 徹 (58卒)

****食事・懇談****

関東支部長挨拶 渡邊 悠三 (69卒)

参加者代表挨拶 磯田 良一 (55卒)

名簿の整備活動 石丸 誠一 (75卒)

会報報告 岩谷 英志 (64卒)

特別講演 「バリ人の生活と文化」

I Wayan Simpen

(通訳: 原真由子)

歌唱指導 渡辺 重視 (64卒)

在学生紹介

閉会の辞 小原 一浩 (63卒)

写真撮影

2010年度 南十字星会 総会

新会長に宮崎氏 拍手で承認

南十字星会の2010年度総会が、10月23日正午から大阪・北区の新阪急ホテルで開かれた。出席者は48人。先生方4人と多くの現役学生を迎え、先輩・後輩が久しぶりに顔を合わせて和やかに歓談した。

席上、会長交代が発表された。6年間会長を務められた山口寛さん(写真の手前)から、新会長・宮崎衛夫さん(写真壇上)にバトンが



引き継がれ、拍手で承認された。プログラムにそってトークが続き、バリ島出身のイ・ワヤン・シンペン先生がインドネシア語で「バリ文化」について講演(次ページに内容を抜粋)。恒例の全員参加の合唱もあり、大いに盛り上がった。

☆

山口さんは会長在任の間、アチェ地震支援募金、協賛金制度や会報・HPの立ち上げ、名簿整備など会の活性化へ献身的に尽力された。後任の宮崎会長は挨拶の中で、ねぎらいの言葉をかけ「前会長には今後さらに“顧問”として残っていただくことになった」と述べた。宮崎新

会長は1965年卒。銀行畑一筋に歩み、現在も世銀の開発経済コンサルタントとして活躍している。

先生方の挨拶ではキャンパスの現況も報告された。「現役学生が“内向き”になったと言われますが、モチベーションは変わらずしっかり持っており、長い目でご支援を」(松野先生)▽「就職難で取り巻く状況は厳しいけれど、専攻語の学生たちは意欲的で優秀です」(福岡先生)▽「2学期から新たに菅原由美先生を迎えました。また、近くバリのウダヤナ大学と学術交流協定が結ばれる見通しです」(原先生)などと話した。



内原正司ジャカルタ支部長のメッセージ

(要旨)

前会長の山口さん、長い間ご苦労さんでした。お陰様で海外を含め卒業生同士や現役学生との繋がりも深まり、今後ますます我々の“絆”が強くなり、結ばれて行くのは間違いありません。ジャカルタ支部では2カ月に1回程度、晩さん会を開催し、親睦を深めております。他大学の同窓会よりはるかに高頻度です。

インドネシアは近い将来経済の大発展が期待されており、40数年後には日本のGDPと拮抗するとも言われています。目下の懸案事項はハードとソフトのインフラです。

これから経営・指導に関係していく日本の方も多いたと思いますが、独立の歴史を正しく認識し、インドネシアの真の声を知っていただくことを願っています。これほど友好的な国は他に見当たりません。利益の追求ばかりではなく、インドネシアのためになることをやるべきでしょう。

シンペン先生の講演 「バリ人の生活と文化」 (抜粋)

バリ島の住民のほとんどはヒンズー教を信仰しています。バリの文化は、そのヒンズー教▽宗教以外の習俗▽外部からの影響一が混在してつくられて来ました。どれが宗教でどれが文化かは区別が困難です。バリの人々が生まれてから死ぬまでの生活の中の儀礼(儀式)に、バリ文化の特徴がよく表れています。具体的にそれを見てみましょう。

まず、毎日の儀礼があります。料理のあとに行うもので「Ngejot」「Segehan」と呼ばれています。15日ごとは、満月・新月の時の儀礼です。35日ごとに行うのは「Tumpek」。210日ごとには「Galungan」「Kuningan」。350日ごとの儀礼は新しい年の始まり、これが有名な「ニユピ」(Nyepi)です。そして1750日ごと、3500日ごと、35000日ごとの儀礼と続きます。こうした定期的な儀礼のほかには非定期的なものがあります。

人の成長過程に伴うものです。第1段階は子どもの時代。生後42日には始まり、生後105日、生後210日にそれぞれ儀礼を行ないます。

第2段階は成人、17歳の時の歯を削る儀礼です。削るのは上の歯の6本です。より理性的な人間らしくなるためという意味があり、歯をそのまま放置していると獣と変わらないと解釈されているのです。第3段階は結婚式。そして、最終は老人となって死に至る段階です。葬式は「ナベン」(Ngaben)と呼ばれ、肉体は死んでも、魂は生きてると信じられています。

《パワーポイントとスライドを使い、ビデオも紹介。最後に儀礼に絡んだ歌を披露。「バリ版の詩吟」のような感じだった》



消息

ひとこと (敬称略)

小藤 保 (41 卒) =兵庫県西宮市
90歳まで卓球を続けましたが10年以降は休みました。無理をせず、おだやかに暮らしております。

井上安寛 (48 卒) =兵庫県加古川市
年齢と共に体調すぐれず、老々生活を送っています。

磯田良一 (55 卒) =さいたま市緑区
10年夏の天神祭で「阪大船」に乗船。7大学定期戦(陸上競技)の応援にも駆け付けました。阪大は前年の東京での戦いに引き続き男女とも2連覇でした。11年は札幌で3連覇を果たすのを楽しみにしております。

吉村英男 (57 卒) =岐阜県大垣市
郷里で小・中学校の同窓会の世話役をし、年寄り同級生の交流を喚起しています。

前田正一 (59 卒) =神奈川県鎌倉市
仕事(環境関係)半分、元気にして居ります。

松木 優 (62 卒) =神戸市兵庫区
インドネシアとの縁はまだ切れず(切らず?)、同国と関係のある協会の事務局をやっています。年1~2回、同国へ遊びに行っております。

広瀬州男 (63 卒) =神戸市北区
夫婦双方の母親の介護もあって多忙な日々です。

山下勝男 (66 卒) =さいたま市浦和区
木下一氏とはインドネシア、マレーシア(大使館)在勤中に幾度かお会いしました。会報を読み、まだまだ元気で活躍しておられることを嬉しく思います。

山本 駿 (67 卒) =岡山市
阪大外国語学部となり、インドネシア語の学生が我々の時代より半減しているのは残念ですが、そこは少数精鋭。頑張ってくださいませ。

岩本武比古 (68 卒) =大阪府枚方市
6年前の病気で現在もリハビリ中です。

加田 治 (69 卒) =川崎市麻生区
07年に計18年のインドネシアの仕事をやめました。今は“悪しき隣人”事情と言語の勉強を。

本田正伸 (69 卒) =兵庫県川西市
10年9月末に15年間のインドネシア・中国の単身生活を終え帰国致しました。

大野 泉 (79 卒) =静岡県天竜市
定年前、最後の会社奉公で、ゴルフカート事業を担当しております。

山本靖子 (85 卒) =京都府宇治市
会報を懐かしく拝見しています。ありがとうございます。

平岡 毅 (94 卒) =京都市山科区
いつも会報を読む度に、ジャカルタ駐在時代や学生時代を懐かしく思い出しています。

◆おくやみ申し上げます◆

北垣乾三 (41 卒)
=神戸市灘区 08年3月死去

高谷 安宥 (43 卒)
=京都市北区 02年7月死去

佐野 毅 (58 卒)
=東京都小平市 10年9月死去

河野亘宏 (59 卒)
=奈良県生駒市 10年2月死去

竹村登史亭 (66 卒)
=京都府長岡京市 09年死去